機関紙が運動を組織する

読まれる機関紙になる
「捨てるごみの向こうに人」

日本労協新聞編集長
松沢　常夫

11月18日に開催した東京土建通信員総会では日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）を招き、田中羊子同理事長からワーカーズコープの歴史と到達点について、松沢常夫日本労協新聞編集長から機関紙の役割についての二つの講演を受けました。社会の崩壊にあらがい、共同労働で地域に本当の社会を作ることをめざすとしているワーカーズコープの運動への理解を深めました。松沢編集長の講演を紹介します。（見出し・文責は編集部）

機関紙を手に講演する松沢さん

「捨てるごみの向こうにも人がいる」のタイトルで1面に記事を載せました。私は40年くらい機関紙の編集を担当していますが、私が編集し始めて2号目でした。

鬼子母神病院の中に私たちの本部があり、そこで私たちは病院の掃除を全部やっていました。院長室の燃えるごみの缶に手をつっこんだら、欠けた瀬戸物でケガをしたと本部に話した田中夏子さんという人がいて、今は日本協同組合学会の会長ですが、それを書いてとお願いして書いてもらったら、その中に「捨てるごみの向こうに人がいるということについてちょっと考えて捨ててほしい」という一文があったのです。私はこれはすごいことだと思いました。短い文章でしたが、1面にもってきて、「捨てるごみの向こうにも人がいる」という大きい見出しで出しました。

そうしたら、みんな関心があったのか、そうだ、そうだという話になり、1人の人が私たちの方も清掃した後、ごみを出すが、このごみがどこへ行っているのか知らない、捨てるごみの向こうのそのまた向こうが大事ではないか。私たちも知らなかったではないかという話になってきたり、注射針がしょっちゅう刺すみたいな話になったり、それで病院でこの問題について、みんなで学習会とか検討会とかいろいろやりました。

患者信頼すればちゃんと捨てる

みさと健和病院で婦長さんが講師になって学習会をやったのですが、その時の「患者さんを信頼して改善出し合う」というサブタイトルがついた記事ですが、これもすごくびっくりした話で、実は病院で掃除をしていると洗面所にカミソリがそのまま置いてあったというのです。たいてい、「患者さんはどうしようもない。ちゃんと捨てる所へ捨てない」というふうになります。そうではなくて、ひょっとしたら捨てる所が決まっていないからで、捨てる所がちゃんとしていればちゃんとしてくれるのではないかと思って、ある女性がビンを置いておいたというのです。ただ置いておくだけでは分からないから、わざわざひげそりを1本入れて置いておいた。そうしたら翌日、もう1本入っていたというわけです。

みんなに読まれどんどん拡大

やはり自分たちが「患者さん何しているの。だらしがない」というのではなく、自分たちがそういう準備をしていくことが大事なのではないかという話が出ました。そうだというので新聞に出したところで、みんなに読まれるのです。看護師や病院のいろいろな人たちもこの新聞をどんどん拡大していくわけです。一つの病院で私たちの組合員は5人くらいしかいないのですが、新聞だけは50部、100部入って、みんなが働き方というのはやはり次の人のことと、関係する人のことを考えて仕事をしようではないかということで議論になっていきました。

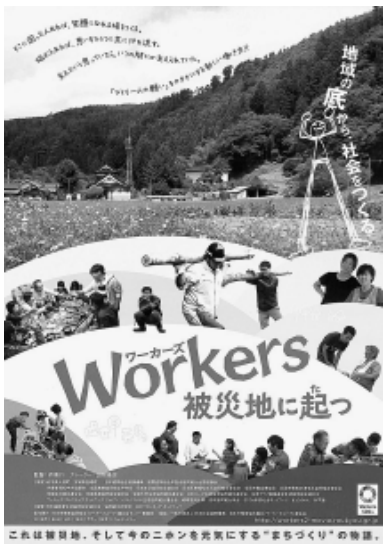
アンケートが話題に
病院と協力し抜本改善

そして厚生省などへこんな現実がある、どうしてくれるのかと回ったのです。そうしたら厚生省の記者クラブに行ったときに、毎日新聞の方がいて、今、日本機関紙協会の理事長をされている北村さんですが、アンケートをとったらよいとアイデアをくれたのです。新聞記事に個別の例では出しにくいので、全国的にこういうふうな状態だと分かると出しやすいというので、病院で落ちている針を拾ったことがありますか、刺したことがありますか、それはどういうときですか、どういう作業をしているときに刺したのですかなどずいぶん細かく聞くアンケート用紙を新聞に貼り付けて、ファックスで送ってもらうことをしました。

わずか一週間でほとんどの現場から返ってきました。集計したら半数の人が刺していました。この時の記事の見出しを最初は「何と酷いことか」としたのですが、これではまずいと「病院と協力、抜本改善を」という見出しで、こういう姿勢でいかなくてはいけないだろうと出したのです。すると病院のなかでこれが話題になり、次から次へと改善の提案がされていきました。

誇りをもって81歳が営業

そういうふうになってくるとみんなが自信を持ってきて仕事の拡大にもいき始めるのです。「言っちゃあ何だがうちのほうがずっときれいだ、81歳の鈴木さんも営業に」という記事です。81歳の人が病院との関係が変わってきて、すごく誇りに思ってあちこち営業にいき、相手の事務長に「言っちゃあ何だがうちの病院の方がずっときれいだ」と言うのです。事務長は分かりましたと言って、一度見にいかせてくださいということで仕事が増えていくというような経験が出てきました。



活動は映画にもなった

清掃は恥ずかしい仕事か

それと並行してやったのが「便所掃除の価値高める」ということで連載を始めました。これをやっていくと、とくに予備校などは汚れがひどいので、組合員は学生はしょうがないと言っていたのですが、ひょっとしたらこれは精神的に参っているのではないかとか、そういう話になり、学生たちを呼んでお茶でも飲もう、声をかけようなどと変わっていきました。ですから人に対する見方が、何だこの野郎ということからちょっと深く見て、もしかしたらこういうことではないかと、人との関係の作り方がどんどん変わっていく、そういうきっかけに新聞がなっていきました。

これは同じところですが「清掃は恥ずかしい仕事なのか」という記事です。病院には働きに行っているけれども掃除をしているとは言わないということをめぐってみんなで議論したことを新聞に出しました。このように新聞を読み合って、みんなで話し合って、ではどうしたらよいのか、何でこうなっているのかということを話し合うなかで、自分たちの仕事に誇りをもっていく、そういういい循環がまわって新聞がいろいろな人の中に広がっていくということが当時ありました。

そのころ、田中夏子さんから、「機関紙の編集という仕事は運動の後追いだと思っていた。機関紙は組織者だとか、機関紙中心の組合活動だとか言われたがあまり実感したことがなかった。しかし松沢さんの仕事を見ていたら、本当に機関紙は組織者だというような気持になってきた」と言ってくれました。最高の誉め言葉だと嬉しかったです。

記録し歴史に刻む
素晴しい組合員の営み

上手くやると新聞というのは運動の後追いではなくて運動を組織していく、本当にみんながやる気を出していく、地域に広げたり、地域と結んでいったり、そういう役割を果たせるのだなということをすごく思います。

20年前の新聞情報会議という会議で当時の理事長が「新聞情報の分野における全組合員経営、共感の経営」というタイトルで講演しています。理事長は「今、大変な時代に情報とか教育宣伝とかの任務、その媒体をつくる仕事というのはどんなに誇りあるものか計り知れない。このことが人間らしさの表れだということを豊かな感性で受け止めて、同時代人としての人間の真実がどこにあるかをいち早くつかみ、底深く迫る。そしてそれをみんなに返し、その深い意味を学びあえるようにし、学んだことを現実の姿にしきるためにどうするかを一緒に考えあう、そういう作業だからこそ大事なんだ。もちろんそれを担うに足りる豊かな人間として自分自身がどう高まるかが、今日参加したみんなに問われている」という話をしています。

そして「本部でも新聞を作るのは大変だけれども、現場の新聞も大変でしょう」と言い、「事業所でニュースを出し続けるのは困難が多いと思うが、なぜ出し続けてほしいかというと、労協組合員1人ひとりの営みは今日の資本主義社会のなかでどんな小さなことでも素晴らしいことだからだ。だからこれを記録し、歴史に刻み込むこと、それだけの価値のある誇りある仕事なんだ」と私たちは励まされました。今もそんな気持ちでがんばれるかなと思います。